



vol.5

取材・文 広瀬麻樹  
撮影 武永智子

感度良好な人間関係が、人の可能性を広げます



# 天満敦子 *Atsuko Temma* ヴァイオリニスト

てんまあつこ●1955年東京生まれ。6歳よりヴァイオリンをはじめ、小学校時代、NHK「ヴァイオリンのおけいこ」に出演。講師の故江藤俊哉氏に賞賛を認められて音楽家への道を志す。東京芸大在学中に日本音楽コンクール第1位、ロンティゴ国際コンクール特別銀賞等を受賞して注目を浴びる。海野義雄、故レオニド・コーガン、ヘルマン・クレンペーバスらに師事。1992年、文化使節として訪れたルーマニアで、薄幸の作曲家ホルムベスクの「望郷のバラード」に出会い、日本に紹介。現在、東邦音楽大学大学院教授。著書に「わが心の歌」(文藝春秋)「天使からの手紙」(無伴奏)に魅せられて「望郷のバラード」(銀の鈴社)がある。

私はヴァイオリンの英才教育を受けたわけではありません。両親はもちろん、親戚にも音楽家と称する人物は見当たりません。6歳の時に母親が「この子は音楽が好きなのかしら…」と感じてヴァイオリンをプレゼントしてくれたのがきっかけです。

といっても、娘を将来音楽家に、などとは毛頭考えていませんでした。私も頑張って練習をするということがなかったの、友人たちに知られることもありませんでした。たまたまNHKで高名な江藤俊哉先生に教えていただく番組に出演することになり、まわりに驚かれたのを覚えています。

番組には数人の子どもが出演していました。その親たちの熱心さに比べ、私の母はのんびりしたもので、江藤先生に「これからも続けさせなさい」と言われたときも「ああ、そうですか?」程度の反応でした。

最近は少しでも子どもに才能を認めると、親たちは過剰な期待をかけて、あれこれと世話を焼くようです。私も生徒を教えています。ほとんどの親が「高望み」をしているのを感じます。その気持ちは十分理解できるのですが、たとえば親同士で交わされるいろいろな噂話を、子どもに吹き込んで競争心を煽るといようなことはやめた方がよいでしょう。

子どもの進路については泰然と構えて、要所だけをきっちりと支えていくこと

が大切だと思います。その点、少し離れたところから黙って見守ってくれていた母には、今でも感謝をしています。

東京藝術大学付属音楽高校時代に師事した海野義雄先生は、当時飛ぶ鳥を落とす勢いの、華のあるソリストでした。海野先生は、「今日はよくできたね」「君が一番だ」ととにかくよく誉めてくださいました。細かく指遣いを教えるのではなく、ただ私が成長するのに大切な、本質を見抜いて指導をしてくださったのだと思います。

私は、音楽高校に入ったからにはヴァイオリンだけ弾いていればいいと思っていたので他の教科はさぼって、成績はさんざんでしたが、そんな勉強の苦労や、家庭についての思春期らしい愚痴も海野先生は聞いてくださいました。

音楽学校では、師匠と弟子は一对一。ですから、弟子にとってもどんな先生につくかは最大の関心事で、悩みも多い。しかし、一度その先生につくと決めたのなら、そう簡単に「先生を替えたい」などと言ってははいけません。不満をこぼすよりも、より深い信頼関係をつくることをめざしたほうが、お互い得るものが大きい。人間に対する好奇心、先入観を持たずにつき合う姿勢が出会いの可能性を広げ、人の可能性を広げてゆくと思うのです。

高校時代には、偶然にも作家の井上光晴さんとの交流を得ることになりま

した。私は最初、光晴さんが高名な作家ということを知りませんでしたが、埴谷雄高さんら作家仲間との集まりに学生の分際で加えていただきました。

当時「純文学」といわれていた分野の方々の会話は、本質を追究するあまり激しいこともあり、若い私はドキドキしたものです。光晴さんにはいつも「ほんものになれ!そのためにはいいものを見ろ」と言われていました。そういう出会いが、私の音楽への取り組みにも影響を与えています。

人に出会った時は、相手に対して一歩引いて様子を探るのではなく、素直にピュアな姿、感覚でいたいと願っています。プラス、「感度良好」でいて、体と神経がパッパッと反応したい。出会いからの過程で相手に対する感度も変化していくはずですが、その変化にもしっかり反応していきたいのです。

今、学校の教室に「感度良好」な師弟関係はあるのでしょうか。音楽を教えていると、何事にも反応に乏しい子どもに会うことがあります。でも、その子どもたちも何かのきっかけで自分の殻を破って他人と激しくぶつかりあうこともある。興味のあることに少しでもつっこんでいけば、もっと踏み込んでいけば、感性・感度は磨かれていきます。若さというのはそれを可能にし、積み重ねていく時間のことだと思います。